

# 「普遍性」と「個別性」

## ～TPPを分析するためのひとつのヒントとして～

On Universalism and Particularism: Another View for the TPP Controversy

### 1 | 芸術に見る「普遍性」と「個別性」

劇作家の山崎正和氏は『装飾とデザイン』（中公文庫2015年）のなかで、人間には「普遍への志向」と「個物への固執」という対極的な2つの意志があり、それが人類の文明史を特徴づけているという興味深い議論を展開している。

たとえば、建築の世界を見ても、ル・コルビュジェの簡潔で極限にまで機能性を追求した「普遍化された」デザイン（たとえば「サヴォワ邸」）とガウディの猥雑極まりない曲がりくねった曲線で装飾された「個別性の強い」建造物（たとえば「サグラダ・ファミリア」）を比較すれば、人間が一方で「普遍的」なものを、しかし他方では「個別的」なものを求めているらしいことを容易に確認できるだろう。たしかに、人間は、簡潔な、どこにでも適用できる基本形を一方で希求しながら、他方ではそれに飽き足らず、そこに自分自身の個性を反映させたいという欲求を抑えきれないものらしい。

実は、この「普遍性」と「個別性」への2つの対極的なものを求める人間の性質はあらゆるところに噴出しているように見える。目、鼻、口、耳を備えた「人間の顔」という概念は普遍性を持つ。これは人種の違い、性別、年齢を超えて普遍的に存在している。しかし、現実には目の前にいる人間の顔はひとりとして同じではない。すべての人間はひとりひとり個別的である。

別の例を考えよう。正三角形は普遍的な概念だが、現実世界では厳密に正三角形の形をした個物は存在しない。プラトンをはじめとする古代ギリシャの哲学者は、いわゆる「アイデア」こそ物事の本質であって、現実にはわれわれが目にするものはアイデアの「模写像」にすぎないと考えた（山崎正和同上書、75頁）。

これは芸術論の素人である私の仮説にすぎないが、ギリシャではいかにアイデアに近いものを現実に創り上げることができるかを問い、それを実践することが芸術的行為の目的だったのではないだろうか。たとえば、ヴィーナスの彫像は「美しい女性」のアイデアを具体的に目の前に創り上げようという彫刻家の必死の努力の結果であった。しかし、そのようにして創り上げられた数多くのヴィーナス像は2つとして同じものにはならなかった。

しかし、アイデアにできる限り近づけることが芸術だという考え方は、ギリシャ芸術に大きな制約を課したのではないだろうか。なぜなら、現実の世界においては、アイデアで表現しきれないものがあまりに多いからである。やがて、芸術家たちは、アイデアとしてのヴィーナス像を徹底して追い求めることをあきらめ、自分が造るヴィーナス像に自分自身の個性を反映させようとしはじめた。もっと言えば、現代的な考え方のなかには、アイデアに代表される完璧な普遍性を追い求めるのではなく、あえて欠落した部分を残すことによって、人間の想像力を掻き立て、造形物の中にダイナミックな動きを生み出すことでかえって物事の本質を浮き彫りにすることが芸術の仕事でさえあるという見方もあるようだ。



たとえばルーブル美術館所蔵の「ミロのヴィーナス」像には腕がない。右腕は上腕部で切れており、左腕は付け根からもぎ取られている。つまり、完全な形の裸像を見ることはできない。しかし、逆説的だが、もし完全なヴィーナス像が現代まで残っていたとしたら、ミロのヴィーナス像がこれほどまでに多くの人を魅了することはなかったのかもしれない。欠落した部分があることによってそれがわれわれの想像力を掻き立て、ヴィーナス像を一層魅惑的なものにしたのではないだろうか。『徒然草』第137段には、「花は盛りに、月は隈なきをのみ、見るものかは」とある。桜は満開の時だけ、月は満月の時だけに見るものだろうか。そうではない。それでは風流ではない、というわけである。

## 2 | グローバリゼーション」と「ローカリゼーション」

「普遍性」と「個別性」という概念は、ビジネスの世界でも適用できる。個々の企業の競争力というのは、普遍的なルールに則り、その機能的・効率的な利点についてはそれをしたたかに利用しながら、いかに独自の(個別的な)強みに磨きをかけるかという点にかかっている。個々の企業までがひたすら普遍性を追求するならば、それは自滅行為になるであろう。なぜなら、その企業は他の競争相手との「差異化」に失敗してしまうからである。

このことは「グローバリゼーション」と「ローカリゼーション」との対比にも通じる議論である。グローバル化が進めば進むほど、他方でローカルな文化に固執しようとするのは人間の常である。普遍的な価値やルールが浸透すればするほど、それに反発するかのようなローカルな考え方が生まれてくる。イデオロギー的に見ると、コスモポリタン志向の強い人はグローバル化の重要性を説き、ローカルな文化を軽視しようとするが、ナショナリズム志向の強い人はローカルな事物の重要性を強調しようとするあまり、逆にグローバル・スタンダードが持つ普遍的な側面を無視しようとする。

しかし、大事なのは、「普遍性」と「個別性」のバランスである。グローバルな世界にも通じ、そこでの普遍的なルール(公正な競争ルール、国際会計基準等)をうまく活用しながら、ローカルな文化が持つエネルギーを自身の創造力の源泉にする、という考え方が必要である。要は「普遍性」と「個別性」のバランスこそ重要なのであって、どちらかに偏りすぎると成功はおぼつかないということなのではないだろうか。

日本という国の歴史を振り返ってみると、ほとんどの時代において、日本人が「普遍性」と「個別性」の間をさまよひ、両者の均衡をどう保つかということに専ら苦心してきたことが分かる。生涯にわたって、日本人のアイデンティティを探し続けた本居宣長はこのテーマにこだわり続けた。そうしてでき上がったのが44巻に上る彼のライフワーク『古事記伝』である。

## 3 | 本居宣長の「からごころ」

本居宣長は『玉勝間(たまがつま)』の中で次のように述べている。

「漢意(からごころ)とは、漢国のふりを好み、かの国をとふとぶのみをいふにあらず。大かた世の人の、万の事の善悪是非(よさあしさを論(あげつら)ひ、物の理(ことわり)をさだめいふたぐひ、すべてみな漢籍(からぶみ)の趣なるをいふ也。さるはからぶみよをよみたる人のみならず、然るには、書といふ物一つもみたる

ことなき者までも、同じこと也。そもからぶみをよまぬ人は、さる心にはあるまじきわざなれども、何わざも漢国をよしとして、かれをまねぶ世のならひ、千年にもあまりぬれば、おのづからその意世の中にゆきわたりて、人の心の底にそみつきて、つねの地となれる故に、我はからごころもたらずと思ひ、これはから意にあらず、当然理（とうぜんのことわり）也と思ふことも、なほ漢意（からごころ）をはなれがたきならひぞかし。」（丸山眞男著『丸山眞男講義録 第七冊 日本政治思想史 1967』東京大学出版会 1998年 284ページより孫引き）。

本居宣長は、中華文明を普遍的なものとして崇めてきた当時の日本人がいかに知らず知らずのうちに「からごころ」に染まってしまっているかを嘆いている。自分の意見が絶対正しいと思って滔々<sup>とうとう</sup>と自分の主張を述べる人の多くは、実は知らないうちに中華文明に汚染されており、実は彼の主張の多くはどこかの「漢籍」（中国人の書いた文献）に載っているものなのだというわけである。また、「漢籍」を読んでいない庶民といえども、実は同じことであって、長い間に中国風のものの考え方が社会に流布してきたために、「からごころ」から脱却できないというのである。

自分たちが知らず知らずのうちに普遍的な文明に飲み込まれてしまい、日本独自の文化（やまとごころ）を忘れてしまっている。その現実を直視することが必要であり、それぞれ「からごころ」を脱却し、「やまとごころ」を取り戻す出発点になるというのが本居宣長の主張である。ここにも鮮明に中華文明という「普遍性」と日本文化という「個別性」が対比されており、知らず知らずの間に「普遍性」の虜になっているだけでなく、自分が「普遍性」の虜になっていることすら気が付かないでいるさまを嘆いている。

ここで本居宣長を持ち出した理由は、彼の指摘がそっくりそのまま戦後日本人にも適用しうると考えられるからである。「からごころ」の相手国は中国からアメリカに移ったけれども、多くの日本人は第二次大戦敗戦直後にマッカーサーが持ち込んだ「アメリカン・デモクラシー」の思想を驚くほど素直に受け入れ、戦争以前の日本文化を「前近代的」「非道徳的」なものとして否定もしくは無視してきた。現代日本人の多くは、「からごころ」ならぬ「えびすごころ」の虜（「アメリカかぶれ」といった方が分かりよいかもしれない）になってきた。本居宣長に倣って言えば、現代日本人も自分自身が「えびすごころ」にとらわれていないかどうかを自問自答し、自分自身を取り戻すべきだということになる。

## 4 | 「文明」（普遍性）を支えるのは「文化」（個別性）である

なぜわれわれはそれぞれの民族が持つ個別「文化」に固執しなければならないのだろうか。その理由はなかなか厄介ではあるが、あえて言うと、人間は個人としては生きていけず、必ず特定の文化共同体の一部として生きるものだからである。共同体から完全に独立した理性的個人というものは、西洋啓蒙思想が生んだ、あくまで抽象的な概念であって、生身の人間はすべからず共同体によって生まれ、共同体の規範の呪縛の中で生活している。

逆に、文明というものはそれぞれの地域に根差した固有の文化の中から、「普遍性」のある部分を取り出し、異なる文化圏においてもその妥当性を認められたものの集合体と解釈できる。したがって、文明は「文化の上澄み

を寄せ集めたもの」と言えるかもしれない。文明は地縁・血縁から解放され、常に都会的であり、特定の地域共同体の束縛を受けないし、その中身は機能的で、明確なロジックで説明できる場合が多い。

以上のような説明を受け入れるとすると、文明は放っておくと時間とともに衰退すると考えられるだろう。なぜなら、それは特定の文化との関係が希薄化するため、大地からの養分を吸収することができないからである。どこでも普遍的に通用する価値観は、逆に言えば、特定の地域共同体が持つ独自の強烈なエネルギーとは無縁であるが故に、そのエネルギーを吸収することができず、長期的には衰退していく運命にある。文明が存続し、発展するためには、どこかで大地の養分を吸収する仕掛けを必要とすると言ってもよいだろう。文明がその力を維持し、発展していくには個別文化が持つエネルギーを吸収し続ける必要があるということである。

シュペンGLERが『西洋の没落』の中で主張したかったことのひとつは、それぞれの地域に根差した個別の文化は大地の栄養を吸収しながら育っていくが、大地から切り離されて、地域性がなくなり、普遍的な文明になってしまったものはもはや大地の養分を吸収することができなくなる。それ故に、それぞれの地域に根差す個性の強い文化がそのエネルギーを文明につぎ込むというプロセスが必要になる。そうでなければ、やがて文明は没落していく。別言すれば、「文明」には生命が宿っていないから栄養を与え続けなければ枯れていく。それに対して、大地に根差す「文化」は植物が育つように生命力を持ち続けているということになる。

したがって、個別文化の役割のひとつは、放っておけば衰退していく文明に生命の息吹を注ぎ続けることなのである。個別の文化を忘れ、普遍的な文明に飲み込まれているだけではやがて文明は衰退していく。逆に、普遍的な文明に飲み込まれ、個別文化を顧みなくなれば、その文化は滅んでいくということになる。たとえば、日本人が「えびすごころ」の虜になって、日本の歴史がこれまで創り上げてきた独自の文化を顧みなければ、やがて日本独自の文化は消滅していく。独自の文化を忘れ、普遍性の高いと思われるその時代時代の文明にかまけているだけでは、その国もしくは民族は衰退していつてしまうだろう。本居宣長が「からごころ」という言葉を使って日本人に警告を発した真意はそこにあっただのではないだろうか。

## 5 | TPPをどう考えたらよいのか

アメリカでは大統領選挙の年ということで、共和党のトランプ候補と民主党のクリントン候補が激しい論戦を展開しているが、その中のテーマのひとつがTPPの是非である。トランプ氏は自由貿易によってアメリカの製造業が疲弊したとして、TPPには反対している。他方、ヒラリー・クリントン氏も労働組合の支持を取り付けるため、TPPには慎重な姿勢を示している。つまり、どちらの候補が大統領になっても、これまで推進されてきたTPPは今のままでは批准されない公算が大きくなってきたということだ。この動きをどう理解すればよいのだろうか。

結論を先取りするならば、アメリカが戦後主導的な役割を果たしてきた自由貿易体制という普遍的ルールは、アメリカ経済の相対的地位の低下によってもはや普遍的ルールとしての地位を維持できなくなってきたと考えられるということである。つまり、アメリカ社会の産業競争力の低下という個別事情が自由貿易思想という普遍的ルールに優先するようになったということである。



ここで2点指摘しておきたい。まず、自由貿易というのは経済覇権国が作り上げるルールであって、経済的弱者も利益を得ることができるという理論構成になってはいるが(リカードの比較優位の法則)、実際は、経済覇権国が最大の受益国として意図的に作り上げたルールだということである。

そもそもアダム・スミスやリカードの言う自由貿易思想が現実に普遍的なルールとして確立するきっかけになったのは、1846年のイギリス議会による穀物法廃止であった。それは産業革命の勃興によって、イギリスが世界経済の覇者となり、自由貿易を推進する方が保護主義的な穀物法を維持するよりも国全体としては利益が大きいと判断したからである。その後、2度の世界大戦を経て、圧倒的な経済大国となったアメリカが主導して、GATT(関税と貿易に関する一般協定)、WTO(世界貿易機構)を経て、自由貿易が普遍的なルールとして認められるようになっていった。

アメリカが覇権国として君臨していた時代には、ほかのどの国も自由貿易思想を正面からは否定しなかった。自由貿易によって被害を受ける自国の産業については、自由貿易の例外として特例を認めてくれるように働きかけることがせいぜいであった。

もう一点。覇権国が弱体化すれば自由貿易という「普遍的」ルールは変質し、各国の「個別的」事情が優先されるようになるということである。WTOという多国間自由貿易交渉はアメリカの経済弱体化とともに後退し、いまや、TPPという特定のブロック内における自由貿易体制に道を譲ったのだが、しかし、実はその部分的な自由貿易体制であるTPPですら、アメリカは反対し始めたということである。2015年に一応の決着を見たTPP交渉の過程で、アメリカ側が自国の自動車産業保護を執拗に求めていたことは記憶に新しいが、第2次世界大戦直後のアメリカなら到底想像できない光景であった。そして、今回の大統領選挙においても、トランプ、クリントン両候補とも、TPP反対の論陣を張るに至って、誰もがアメリカの経済的凋落を実感したのであった。

TPPの議論を通じて明らかになってきたことは、自由貿易思想が普遍的なルールとしてその地位を失い始めたということである。経済覇権国のアメリカが自由貿易思想に対して保護貿易的なスタンスを取り始めたからである。それでは、世界はこれから保護主義的色彩を強めるのであろうか。また、それは望ましいことなのであろうか。

日本が普遍的ルールとしての「グローバル・スタンダード」に適應すべきだと考えている人は多い。普遍的ルールに対応することこそが進歩的だとする風潮も強い。しかし、それだけでは十分でない。なぜなら、TPPの例に見られるように、「グローバル・スタンダード」は国際的な政治経済情勢によって動くものだからである。アメリカの経済的凋落によってWTOは力を失い、TPPもその運用にあたってはさまざまな条件が付けられるようになってきた。普遍的なルールと見られてきた自由貿易は今や普遍的ルールとしての地位を追われようとしていると言えるだろう。

それでは、自由貿易体制は崩壊するのだろうか。世界は再び保護主義に走ると見るべきなのだろうか。しかし、がちがちの保護主義は経済戦争を招き、国家間の対立を生む。これはわれわれが20世紀前半に嫌というほど味わった歴史的経験である。

日本にとって重要なことは、自らを普遍的ルールに適合させるだけではなく、世界に通用する新たな「グロー

バル・スタンダード」を創り上げるといふグローバル・ルールメーカーとしての発想である。たとえば、すべてを自由化しなければいけないという従来の新自由主義的発想ではなく、それぞれの国が持つ個別事情に対してお互いに「相互承認」を与えるという発想をもとに新たな国際経済秩序を再編成するという考え方を打ち出していくというのはどうであろうか。この「相互承認」は、がちがちの保護主義に組みしただけでなく、各国、民族が持つ固有の文化や伝統を相互に承認しつつ、それを前提に穏やかな自由貿易体制を構築していくという考え方である。

以上を整理すれば、次のようにならうか。すなわち、「普遍性」が「個別性」を押しつぶすのではなく、「普遍性」の合理的な部分は活用しながらも、「個別性」が「普遍性」に生命を吹き込んでいくという発想が必要ということである。「普遍性」が常に絶対の真理を示しているわけではなく、自由貿易体制のように、時代によってルールを変えていくことで時代に適合させ、その普遍的な価値の延命を図ることが必要なのである。